皇慶撰『弥陀念誦略私記』再考

道元徹心

はじめに

平安中期の天台僧に台密谷流の祖とされる池上阿闍梨皇慶がいる。本稿では皇慶（九七七～一〇四九）の思想特徴の一面について考察していく。皇慶に影響を及ぼしていると考えられる台密の五大院安然（八四一～？）の思想と、皇慶の少し後に登場する東密の覚鑁（一〇九五～一一四三）の思想にも注意を払いつつ論述したい。

覚鑁に代表される真言側の密教浄土教を考察する上では、そこに影響を及ぼしたと推測される安然の思想からみていく必要があろう。堀内規之氏によると、覚鑁に影響を与えた人物に仁和寺済遅（一〇二五～一一一五）がおり、この済遅の密厳国土論に重大な影響を与えた人物が五大院安然とされる。安然は『菩提心義抄』に『菩提心論』を引用して、その中で『菩提心論』所説の「密厳国土」と『大日経義釈』所説の「密厳仏土」、そして『大乗密厳経』所説の「密厳仏土」とが同一であるとする。そしてその三者を同一としたのは安然が最初で、済遅に多大な影響を与えていると堀内氏は指摘する。(1) 密教浄土教については天台と真言の両面において捉える立場が多いが、筆者は本稿において密教浄土教をあくまで真言宗系の立場で捉えて論を進めたい。

叡山浄土教は『常行堂』を拠点に展開したとみることもできよう。全国に現存する常行堂本尊の多くは五智宝冠の阿弥陀仏である。叡山西塔に現存する常行堂本尊も創建当初は五智宝冠仏であったと考えられる。この阿弥

陀仏は密教仏に類するとみられ、その由来は円仁将来の金剛界八十一尊曼荼羅に基づいているとされる。常行堂では『摩訶止観』所説の九十日を一期とする常行三昧が行じられている。そこでは円仁が五台山から伝えた五会念仏が止観念仏と融合して行じられ、その点に叡山浄土教の特徴があるとみられてきた。しかし、密教仏としての本尊を考えると密教教理が少なからず常行堂の行法に導入されていたのではないかと推測される。五会念仏が顕教浄土教の法会であったか疑問視する点と安然の『金剛界大法対受記』には『略出念誦経』の金剛言詞の説明に五会念仏が引用されるなどのことから、円仁伝承の常行三昧を密教の行であった可能性が高いとする指摘[2]もある。顕教であるはずの常行堂本尊を密教仏と解するには顕密両者の関係が明かされる必要があろう。この常行堂本尊の阿弥陀仏像に対して筆者は既に別稿[3]において考察し、大日即弥陀思想の意義付けが安然の『菩提心義抄』に見出せる点を論じた。この常行堂本尊と思想的に深く関係するのが紅披璃色弥陀を説く皇慶の思想である。常行堂の五智宝冠の阿弥陀仏像と真言の紅披璃色弥陀とは相互影響が考えられる。苫米地誠一氏は常行堂本尊像との関連を推定して、初め台密において成立し、それが東密に伝わった可能性を挙げている。[4]

皇慶は密教仏としての阿弥陀仏を説いているとみられ、顕教の浄土教で説く他方世界としての仏国土に往生する思想ではなく、行者の三昧によって得られる即身成仏を目的とするものと考えられる。そこで皇慶の思想を考察するにあたり彼の著『弥陀念誦略私記』を中心にして論じることとしたい。

一　皇慶の生涯と著作

皇慶（九七七～一〇四九）については『谷阿闍梨伝』などによってその生涯を知ることができる。台密谷流の祖として知られ、谷阿闍梨とも池上阿闍梨とも呼ばれた。俗称は橘氏で、幼くして雄弁で七歳で初めて叡山に入

っている。法興院十禅師静真の門に入り東塔阿弥陀坊に住し、歳若くして密教を学び梵字悉曇を修めた。また生来山岳斗藪を好んだとされ、諸国を遊歴している。長徳年間には伊予国に行き、普賢延命法を行じている。そして鎮西に赴いた際には東寺の明師であった景雲阿闍梨に師事して弘法大師将来の真言法を伝授される。寂昭上人と共に入宋しようとするが果たせず、肥後国の背振山において一夏の修行を実践する。萬壽年間に丹波に行き十臂毘沙門法を修め池上坊において自ら所持する仏舎利を礼拝する行をする。そして永承四年（一〇四九）七月二十六日に七十三歳で東塔の井房で遷化する。[5]

皇慶は数多くの著作を撰したとされるが現存例は少ない。彼の思想特徴が表れているものに『弥陀念誦略私記』があり、その他、『四十帖決』と『行林抄』がある。『四十帖決』[6]は弟子である大原の長宴（一〇一六～一〇八一）の台密事相に関する質問に皇慶が答えたものを長宴が筆録したものである。総じて四十帖となったもので、台密の谷の三流（三昧・穴太・法曼）の総口決とされる。また『行林抄』[7]は戒光坊静然が皇慶の私記を中心にして筆録したものである。その第四に「阿弥陀法」があって皇慶の思想を探る上で欠かせない資料である。

『弥陀念誦略私記』は『行林抄』第四「阿弥陀法」と内容がほぼ同一とみられる。また『行林抄』第四「阿弥陀法」記載の「池上私記」は空海作と伝承される『無量寿次第』とも内容的に同じである。『行林抄』第四「阿弥陀法」には「池上私記有両三本。付観行軌少少存略。大旨同矣。[8]」とあることから『丹州調門私記』など複数の「阿弥陀法」が撰述されたようである。その内の一本（「阿弥陀私記丹波」）は曼殊院蔵の古写本として伊東史朗氏によって紹介[9]されている。諸本共通して、儀軌によって道場荘厳する次第は若干の出入りと順序が異なるものの、香水・加持供物・浄三業・五悔・発願などの作法を説いている。そして道場観として本尊を観法する内容は、紇哩（きりく）の二字から大光明が放たれその光に遇う者の滅罪が説かれる点で諸本共通している。行者の観法によってその紇哩二字が阿弥陀仏へと変じることが説かれる。

平等院鳳凰堂の弥陀は定朝作として名高く、定朝様の仏像はその後の規範となっていくが、曼殊院蔵『阿弥陀念誦略私記』の奥書によると、皇慶の道場観が定朝様阿弥陀像の典拠となっていることが指摘[10]されている。また『阿弥陀念誦略私記』の古写本では沼本克明氏によって高山寺蔵本の五悔の部分が翻刻紹介[11]されている。その他に京都大学附属図書館に架蔵されている『弥陀念誦略私記』（以下『略私記』と表現する。）がある。この写本は古写本ではなく紙の状態から近代初期のものと思われる。奥書には「于時長保五年二月於鎮西調門大山寺偸以抄之　天台山沙門金剛弟子皇慶抄之　以故三昧阿闍梨本写了」[12]とある。奥書より、この文献は長保五年（一〇〇三）二月に太宰府の大山寺において皇慶によって説かれたものであろうと思われる。

二　『弥陀念誦略私記』（京都大学附属図書館所蔵本）とその内容

『弥陀念誦略私記』の諸本中でも京都大学附属図書館蔵本には他本に見られない記述部分があり、次に示すように翻刻紹介して考察を進めたい。

［第一紙表］

弥陀念誦略私記

先ズ擇地ナリ　如ニシ軌説ノ一次ニ行人ハ洗ニ灌シ衣裳一ヲ染ニ縫ス浄衣一ヲ内外澡浴シ廣ク發ス浄菩提心一ヲ　次ニ建ニ立ス道場一ヲ　如ニシ軌説ノ一私ニ云ク若シ難ケレバ具ニシ事縁一ヲ者ク皆可シ用ユル一前ノ机一ヲ恐ク遂ニ軌意一ニ軌説ク荘厳畢レ者安ニ置ス於堵ノ西面一ニ於テ堵ノ東面一ニ安ス小座一ヲ

行人ノ所居也

次ニ置クニ弁備供物ヲ以テ焼閼塗花飲食燈明等ノ内外供ヲ置キニ

列壇上ニ又タ以テ香水ヲ置ク壇ノ左方ニ加ヘテ安ニシズ散杖ヲ凡ソ置ニ供物ヲ時

加持順廻列　如シ

例ノ但タ説ク我従リ過去世ニ　三業用ヒテ蓮ヲ合スト上

［第一紙裏］

次ニ普禮シ印明ス　観念ハ如シ軌ノ　次ニ着座ナリ　次々作法ハ如シ常ノ清

浄光澤ハ用フ蓮華部ヲ　次ニ驚覚　次ニ五悔　用フ金剛界ヲ　若シ不レバ用ヒ

供養文唱礼五悔ニ者ハ替テ用フ金剛印明ヲ　次ニ發ニ願ス五大

願ヲ　次ニ三部　次ニ被甲　次金剛墻　次道場観

先ズ結ビ定印ヲニ仰ギ右手ヲ安ズ左掌ヲ上ニ二大指端相柱観レズ之ヲ

前ニ地界之上内作シ水想ヲ見ルニ水澄清ナルヲ亦タ令シム明了ニシテ无ニ分

散ノ意ハ既ニ見　見ルニ氷ハ映徹ニシテ作スヲ瑠璃ト

琉璃地ノ内外映徹シ地上以テ黄金繩ヲ雑レル厠ニ

間ニ錯シ其地ヲ上観ズ宝樹ヲ一一ニ観レズ之ヲ七重行樹

七宝花葉无レシ不ニルコト具足セ有リテ八地水ニ七宝ノ所

［第二紙表］

成池底布ニス金沙ヲ一一ノ水中ニ有リ六十億ノ蓮華百宝色ノ

鳥ニ和鳴哀雅シテ常ニ出ス讃　音ヲ衆宝國土一一ノ界

楼閣中ニ有リ无量ノ諸天ー作ス天ノ伎樂ヲ

又有リテ樂器ー懸ケ処虚空ニ不レ鼓自鳴此衆音ノ中皆出ニ念ス

三宝音ヲ又地上作ス蓮華想ヲ其ノ花　臺上

自然ニ有リ四柱ー　有リテ微妙宝珠ー以テ為ス映

餝ヲ　已上経文抄レス之ヲ

次ニ大虚空蔵普通供養印明　如シ軌ノ　次ニ紇哩字観ズ定印ヲ

如ク前ノ想ヘ先蓮華臺　紇哩字字放ツ

大光明ヲ　遍ク照シ十方世界ヲ其ノ中ノ有情遇ヘ

[第二紙裏]

斯ノ光ニ者無シ有ルコト不ルコト得ニ罪障消滅ヲ　已上軌文　此字変ジテ成ス蓮華ヲ

蓮華変ジテ成ス阿弥陀如来ヲ相好无

相好ヲ具ニ不レ可ラ説ク可シ見ニ観経ノ文ヲ儀軌ノ文云ク壇

羅若然シテ可シ観ズ八曼荼羅ヲ繁故ニ不レ説カ　佛ノ

左辺ヲ更ニ想ヘ一大蓮華如ク前ノ无シ呉復タ想フ一大蓮華在リト

佛ノ右辺ニ想一観　左ノ花上ニ亦タ放ツ金光ヲ

想ヘ一大勢至菩薩像坐スト右華上ニ佛菩

薩像皆金色其光　樹下亦有リ三蓮ー

各有リ一佛二菩薩像ー又阿弥陀如来放ツ无

量光明ヲ一一ノ光明遍ク照シテ十方世界ヲ念佛ノ衆生ヲ摂取シテ

不レ捨テ其ノ光明相好ハ　具ニ説ク佛ノ身量ヲ最

［第三紙表］

大ハ丈六八尺此凡夫行人ノ所ナリ観ズ　已上経文　行者如レク是ノ了

了分明ナリ観即チ成ズ真實一如極楽世界ヲ　廣クハ如シ観経ノ説ク之ニ

次ニ如来挙

以テ左手ノ四指ヲ握ル拳ヲ直

金剛拳握ル左大指甲ヲ即チ成ズ以テ此ノ拳印ヲ印ス地ヲ真言加

持七遍変ジテ其ノ世界ヲ真言日ク舉歩　引入　欠　右轉スルコト三迺

次ニ三力偈　次ニ送車輅　次ニ請車輅　次ニ迎請聖衆

蓮華部迎請　次ニ辟除従魔馬頭　次ニ示三昧耶　次金剛

網　次ニ金剛火院　次ニ閼伽　私云二手作ス八葉印ヲ拳ヲ

閼伽器ヲ置ク三所ニ奉献ス然ニ

後即閼伽水三滴盤　次ニ花座　次ニ重ネテ結ス大界ヲ　次ニ又閼伽

［第三紙裏］

我以テ本性清浄水ヲ　但テ此度无シ漏ルコト於盤ニ洗ニ浴シ如来身ヲ或无レク器者用フ印明ヲ

次五供養　如シ前ノ奉ジテ三門用フ蓮華部ヲ　次ニ普供養　印明如シ軌ノ　次ニ讃

次ニ入定用フ前ノ入定印ヲ観ジ身中ヲ円満潔白ニシテ猶如シ浄月ノ仰テ

在リ心中ニ於テ浄月上ニ想ヘ紇哩字ヲ放ツ大光明ヲ其ノ字変ジテ成ズ

八葉蓮花ヲ臺ノ上ニ有リ観自在菩薩ノ相好分明ナル左手持ニ

蓮華ヲ右手ニ作ス開キ花葉ヲ勢ヲ是レ菩薩作ニス是ノ思惟ヲ一切ノ有情身　覚ニ悟ス蓮華清浄法界ヲ不レ染マラ煩悩ニ於テ蓮華八葉上ニ各有リ如来ニ入定シ結跏趺坐ス面ヲ向ケ観自在菩薩ニ頂佩ク円光ニ身ハ如シ金曜ノ即チ想フ此ノ八葉蓮華漸舒漸大量ナルヲ同ジニ虚空ニ観シ了テ定中ニ誦ス唵娑婆

［第四紙表］

羅跛娜麼一　即作ス是覚ヲ花照ニ触ス如来海会ヲ願ハ成ズ大供養心ヲ不レシテ移ラ此定ヲ則チ於テ无辺ノ有情ニ深ク起ス悲愍ヲ以照触セバ者於テ苦ノ煩悩ニ悉ク皆解脱ス等ニ同ナリ観自在菩薩ニ即チ想フ蓮華漸々収斂スルヲ量等シ己身ト想ジ已リ誦ス唵僧伽囉跛娜麼ヲ即チ出レス定ヲ次ニ観自在菩薩印二手外相又乃至真言日ク私云ク想ハ自身等同ジ観自在菩薩ト

次ニ根本印　如シ軌ノ　次ニ加ニ持ス念珠ヲ正念誦ナリ又有リ字輪観一在リ別文一念誦畢リテ珠ハ安ンズ本所ニ

次ニ入定以テ二手ヲ外相又乃至廣ク如シ无量壽経ノ所説ノ

［第四紙裏］

次ニ根本印明　如シ前ノ　次ニ部母　蓮華部　以テ所修善ヲ専ラ奉レス此ニ従リ初發心一至ルマテ于佛果ニ令シメント所修ノ善根領持シテ不ザラ中滅没シ上

次ニ五供　次ニ普供　次ニ讃　次ニ祈願　次ニ閼伽　先ニ捧レ器ヲ祈ル

願クハ後ニ誦レ明ヲ此瀬口也　詞ニ云ク　唯ダ願クハ聖者　不レ越ヘ本誓ヲ成ニ就ス我願ヲ

次ニ解界以テ前ノ火院印ヲ誦ス明ニ左轉三迊ス　次ニ奉シ送ス先ニ従レリ

座下ハ起居シ礼ス佛ヲ　次ニ長跪シ結ス前ノ宝印ヲ　云々具ニ如レ帆ノ

想ハ弥陀如来及界會聖衆乗シテ宝車輅ニ還ズ本土ニ　如来ハ雖モ説ク去来之云々ト

次ニ云部　次ニ被甲　次ニ五悔

但ダ起首之時最後結願之時皆ナ用フ之ヲ中間ノ餘ノ時ハ用フ

［第五紙表］

後一悔ヲ

次ニ廻向即チ従レリ座下處誠禮シ佛ヲ即チ出ス道場ヲ随ヒテ意ニ経ニ行シ堂ヲ

外ニ作ス善ヲ具ニ在リ軌文ニ

竊カニ述ルニ愚慮ヲ聊カ者繁補闕恣文義訛謬ナリ弥陀加ヘ冥加ヲ

于レ時長保五年二月於テ鎮西調門大山寺ニ偸シ以テ抄ス

之ヲ　天台山沙門金剛弟子皇慶抄ス之ヲ

以テ故三昧阿闍梨本ヲ写了ス

（京都大学附属図書館所蔵写本を翻刻したものである。写本通りの改行とした。返り点・送り仮名は筆者が便宜上付した。）

次にこの写本に説かれる内容について述べていきたい。冒頭に「先擇地」とあるが、本尊を荘厳する須弥壇のように、壇を作るに当たって適当な地を選ぶことを次第の第一に説いている。それ以下は儀軌に基づいて説く。行者の衣裳（法衣）を清め広く浄菩提心を発して道場を建立する。暫定に机を用いることも可能としている。壇の西に向かって壇の東面に行者が観法する為の小座を安置する。そして供物や燈明を置き、香水を壇の左方に置き嫡水器の水を撒くための杖を安置する。

次には本尊や諸尊を普く礼拝し印契と真言を為す。着座して作法を進め、金剛界の懺悔礼仏法である五悔（至心帰命・至心懺悔・至心随喜・至心勧請・至心廻向）を行う。そして五大願を発願する。五大願は顕教の四弘誓願に対応するもので、衆生無辺誓願度・福智無辺誓願集・法門無辺誓願学・如来無辺誓願事・菩提無上誓願證の五願である。これは真言行者の通願とされ、五大願は仏果円満して五智を證得する因行で、五願とも自利利他に通じて従因至果の次第による誓願であるので、金剛界立の行法にこれを唱えるとされる。[13]

そして両部不二の最深秘法である三部を実践し、護身法五種印言の一つ被甲[14]を修して、次に道場の四方を結界するための金剛桶[15]を整えて道場観に移る。

次に行者は印を結び、水清浄なることを観想する。瑠璃の水中樹林を観想し、水中に六十億の蓮華と百宝色の鳥が有り妙音が響き、国土の一つ一つの界に楼閣があって見事な楽器による音が出されることを観想する。これらの内容は経典に依っていることを示している。その経典とは、ここに説かれる表現と内容から判断して『観無量寿経』と判断される。『観経』の第二水想観から第三地観と第四宝樹観と第五宝池観および第六宝楼観を抄出したものであろう。

次に大虚空蔵普通供養印明をする。そして「紇哩（きりく）」の字観を実践する。そこでは『観経』に依った観想を説いている。また蓮華臺を観想する。そして紇哩の字が大光明を放ち十方世界を照らし、その光に遇う有情は罪障が

消滅すると説くのである。その紇哩の字が変じて蓮華を成し、その蓮華が変じて阿弥陀如来を成ずることを説いている。ここを『略私記』は「相好を具に説くべからず。観経を見るべし。」と説き、正に『観経』第七華座観を想起させる所説と考えられる。『観経』では蓮華座の無量の光明を説いて次のように示す。

一一ノ葉ノ間ニ。有リ二百億ノ摩尼珠王一。以テ為ス二映飾一ト。一一ノ摩尼珠放ツ二千ノ光明一ヲ。其ノ光如シ二蓋ノ七宝合成シテ。遍ク覆フ二地上一ニ。釋迦毘楞伽摩尼寶以テ為ス二其ノ臺一ト。此ノ蓮華臺ハ。八萬ノ金剛甄叔迦寶。梵摩尼寶妙真珠網。以テ為ス二交飾一ト。於テ二其ノ臺ノ上一ニ。自然ニシテ而有リ二四柱ノ寶幢一。一一ノ寶幢如シ二百千萬億ノ須彌山一ノ。幢ノ上ノ寶縵如シ二夜摩天宮一ノ。復タ有リ二五百億ノ微妙ノ寶珠一。以テ為ス二映飾一ト。一一ノ寶珠ニ有リ二八萬四千ノ光一。一一ノ光作ス二八萬四千ノ異種ノ金色一ヲ。一一ノ金色遍ニ二其ノ寶土一ニ。處處ニ變化シテ各作ス二異相一ヲ。或ハ為リ二金剛臺一ト。或ハ作リ二真珠網一ト。或ハ作ル二雜花雲一ノゴトク。於テ二十方面一ニ隨テ意ニ變現シ施二作ス佛事一ヲ。是ヲ為シ二華座ノ想一ト。名ク二第七ノ觀一ト。[16]

蓮華の光明が重なり蓮華臺を為し、光明は意に随って変現して仏事をなすことを説く。これが第七華座観で、そのような華は法蔵菩薩の願力所成によるもので弥陀を念じようとする者は先ずはこの華座想を為すことを説く。その想が成ぜば五万劫の生死の罪が除かれることを『観経』で示す。ここで注意すべきは『略私記』では『観経』所説の弥陀の願力を説くわけではない点である。顕教の説相を引用したまでで、弥陀の光明と相好を説くことに趣旨があると理解されよう。

『略私記』（第二紙裏）は続いて仏の左右の一大蓮華を観想することを説き、その華上の一大勢至菩薩像を観想することを示し、樹下に三蓮華あり各々一佛二菩薩像あると説く。そして阿弥陀如来の無量の光明は十方世界を遍く照らし念佛の衆生を摂取して捨てはしない旨を説いている。『略私記』は已上経文とするがこれも正に『観経』第八像観の文章に依っていることは明らかである。

次に如来拳を示している。これは道場観の際に用いられ、この如来拳印をなし浄土変真言を誦して加持すると

その世界が変じて浄妙仏土となるとされる。[17] そして次に三力偈（行者の功徳力・如来の加持力・法界力と三力相応して普く供養を成就する旨を説く偈）[18]を唱える。続いて車輅が示される。『略私記』では送車輅・請車輅と示されるが、修法中に本尊聖衆を招請する為に七宝荘厳の車輅を本尊の浄土に送る義を表す印明とされる。[19] その後に三昧耶・金剛網が示され、続いて閼伽の作法が説かれる。『略私記』では行者が二手で八葉印を結び閼伽器を置いて閼伽水三滴と説く。密教では六種供養の一つとされ『略私記』所説のように説き、一滴の水を供養雲海とし本尊聖衆の身を洗浴して、本性清浄の智水を以て行者の三業を清浄ならしめて、一切の煩悩罪垢を洗除して灌頂を授け給えと観想することが説かれる。[20]『略私記』（第三紙裏）でもほぼ同様に説いている。

そして次に五供養・普供養・讃が示され、入定を説いている。行者の身中を円満清浄な月の如くに観想するのである。『略私記』では行者の心中の月の上に紇哩の字を観想する旨を説く。その字（種子）は大光明を放ち、変じて八葉蓮華を成す。その蓮華蘤の上に蓮華を持つ観自在菩薩が在すと観想し、一切の有情は蓮華清浄なる法界に如来が蓮華上に結跏趺坐して仏身が金光に輝く相を観想する。行者はこのように観想を成就して禅定中に真言を誦し、如来の大悲心に触れることを『略私記』（第四紙表）には次のように説く。「如来海会を照触し大供養心を成ず。この定を移らずして深く悲慜を起こし以て照触せば苦の煩悩に於いて悉く皆解脱する」とあり、これは『観経』の第八像観の「是ノ心作仏ナリ是ノ心是仏ナリ、諸仏正徧智海ハ、従リ心想ニ生ズ。……中略……作ニ是ノ観ヲ者ハ、除キ無量億劫ノ生死之罪ヲ、於テ現身ノ中ニ、得ニ念仏三昧ヲ」[21]と示す説相と相通じる一段といえよう。

『略私記』では以上に続き蓮華が収斂する想が己身と等しいと観想し、真言を誦して禅定を出ると示す。次に根本印明を示し、念珠を加持し字輪観などが説かれる。そこでは「無量寿経の所説の如し」として『無量寿経』も典拠に挙げている。続いて五供・普供・祈願・閼伽が次第として示される。

そして起居して仏を礼拝し弥陀如来および聖衆が車輅に乗じて本土に還ることを観想するのである。そして廻

向が説かれる。佛を礼拝し道場を出て意にしたがって堂を経行するのである。最後に『略私記』は弥陀の冥加を請う一文で閉じられる。

以上が京都大学附属図書館所蔵『弥陀念誦略私記』の内容である。

三　安然の影響について

次にこの内容を基に、皇慶の思想特徴の一面を探ることとしたい。『行林抄』によると『略私記』の諸本は密教の儀軌の他に「無量寿経」「観経」を所説の典拠としていることが示される。『略私記』の特徴としては『行林抄』所載の『丹州調門私記』と同様に「観経」の真身観から「一一ノ光明徧ク照ス十方世界ヲ念仏ノ衆生ヲ摂取シテ不レ捨テ其ノ光明相好」[22]と引用する。その一段の初めには「前の如く想へ先ず蓮華盤紇哩　大光明を放ち遍く十方世界を照らす」として滅罪を説いており、顕教と密教との融合が考えられる。行者は観心を以て阿弥陀仏が顕現する道場を建立するのであり、それは道場観である。『略私記』では「観経」によって表現する部分が相当大きく、顕教の立場で説かれた弥陀が皇慶において密教に取り入れられた形になっていると考察される。表現は「観経」に依りながらも説かれる思想は密教思想上の弥陀であるといえよう。

この皇慶における顕密融合の思想についてさらに考察を進めたい。『四十帖決』に

凡ソ顕密ノ二教是一也顕教ニハ分ニ別ス諸法ノ相性ヲ密教ニハ其可レシト修ス二方法ヲ一説也[23]

とあり顕密一致観がみられる。獅子王圓信氏によると皇慶は台密事相の権威で、密教の事作法を修める目的は心中所具の法門である浄菩提心を開顕して即身成仏することと論じている。[24]それは『四十帖決』巻一五「行法肝心」において

凡ソ一切功徳法門ハ悉ク行者心中ノ無始ノ理具之法門也。若シ不レバ修行一在リテ二纏中一不レ顕レ。修二行之一ヲ者。開顕スルコト無シレ疑ヒ。故ニ一切之行法等我ガ心中所具之法門ヲ行ヒ顕ス也。(25)

と説かれる通りである。

行者は浄菩提心を開顕して即身成仏するとされるが、この浄菩提心に焦点を当てて次に考察を進めたい。浄菩提心について筆者が調査したところ、この浄菩提心は『略私記』諸本において、京都大学附属図書館所蔵本のみにその記述がみられる。浄菩提心とは行者の純白清浄な菩提心をさす。(26) その京都大学本『略私記』の冒頭に「浴廣發浄菩提心」とあり、浄菩提心を発すことを勧めている。天台の証真は『天台真言二宗同異章』に

此レ浄菩提心門トハ。名ク二初法明道一ト。於テ二諸ノ顕教一ニ究竟ノ理。望二ムハ真言門一ニ是レ則チ初門ナリ。(27)

とあり、顕教では究竟の理とするが真言では悟の初門と位置付けている。

またこの語は覚鑁（一〇九五～一一四三）の著述に多くみられるので覚鑁の著述を次に四例示したい。先ず『五輪九字明秘密釈』には

成二五輪世界一ヲ。若シ約二行者一ニ。以テ二白浄信心一ヲ為ス二五輪種子一ト。白浄信心ト者ハ浄菩提心ナリ。(28)

とあり五輪種子とし白浄信心としている。また二例目として『心月輪秘釈』には

問フ。一切ノ本尊ハ皆有リ二心月一。……中略……答。此ニ有リ二一意一。……中略……法界ノ体性浄菩提心　為ス二心月輪一ト。(29)
若シ以テ二阿閦一ヲ為ニ本尊一ト者。円鏡蔵識ノ浄菩提心為ス二心月輪一ト。

として本尊所具の心月について浄菩提心と説き、法界体性智の浄菩提心を心月輪として仏の立場で説いている。

また三例目として『真言浄菩提心私記』の冒頭には

夫レ。真言ノ浄菩提心トハ。是レ自性法身ノ心地ナリ法界大日如来ノ心王具体ナリ。……中略……又タ此レ浄菩提心トハ。是レ一切衆生ノ自然本有ノ心地実際ナリ。(30)

と説き、大日如来の心地であり一切衆生の本有と示す。四例目に同じく覚鑁の『真言三密修行問答』に

問。浄菩提心ト者ハ。本源是レ何者乎　答。浄菩提心ノ本源者ハ。無始無終本来常住一大法身ナリ。摩訶毘慮遮那心地ノ法界也[21]

として浄菩提心の本源を毘慮遮那の心と示し、覚鑁は主に約仏として仏果の位の立場で説いているようである。また覚鑁が師事した済遷（一〇二五～一一一五）の『五相成身義問答抄』には

私ニ云ク。此レ浄菩提心門ト者ハ。此ノ相ハ當ニ初ニ證ニ入ス真言門之位ニ。或ハ亦タ當ニ密家之等覚地一也。[22]

として悟入の始まりと位置付けられている。以上のように浄菩提心は密教では仏の立場で説かれる。

覚鑁の説き方とは異なり、安然の場合について検討を加えたい。安然は『菩提心義抄』において浄菩提心を五相成身との関係で次のように説く。

問フ。前ニ言ヲ圓教初住以上ノ眞言凡夫ハ以上修ニシテ此ノ三摩地門一ヲ。三摩地門ハ即チ是レ大日經中ノ淨菩提心ナリ。是レ則チ此ノ中ノ五相成身ナリ。何ヲ以テ五相以前ノ身ハ證ニス十地一凡夫爲ニ別圓等覺ノ凡夫一ト。答。如ニ天台ニ云フ一。圓教ノ初住以上ハ具ス上諸地功德ヲ。乃至妙覺亦タ具ス以下諸地功德ヲ。是レ約ニ内證ニ初住亦タ具ス等ト妙ノ行相ヲ。又云ク。本下迹高如ニ初住ノ人垂ニ妙覺迹一。此レ約サバ外化ニ初住モ亦タ具ス等ト妙覺ノ行相一ヲ。故ニ初住ノ人モ亦タ修ス等覺ト妙覺ノ行相法一ヲ云云。又眞言宗ハ削リ地位之階漸ヲ立ツ等ト妙之頓旨一ヲ。故ニ從リ凡地一直ニ入ル佛地ニ亦修ス等覺ト妙覺之行一ヲ云云。[23]

天台円教では初住以上が一分の悟を得て初住位は等覚妙覚の行相を具えるのに対して、真言宗では地位の階を削って凡夫地より仏地に直入する。よって凡夫地において等覚妙覚の行を修めることとなる。この出拠において安然は浄菩提心を五相成身に関係付けて説いていることに注目される。五相成身は五相成身観として説かれ、行者が五段階の観法を実践して即身成仏する金剛界の行法である。それは通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛身・仏身円満の五段階である。第一の通達菩提心は悟への心で行者自身が月輪を観法することである。第五の仏

身円満は行者が最後に仏と一体であることを悟ることである。

坂野栄範氏によると五相成身観の名目は『金剛頂経瑜伽十八会指帰』に説かれるが、実践的観法の内容が不明で、諸の儀軌にも五相成身観を説くが五つの形式名目と観法内容が一致しないとされる。また古来の釈義では五相成身は仏果の上の妙用と説かれ、或いは前四相が因位で最後の一相が仏果位とする解釈もある。台密・東密・小野・広沢流などで種々な解釈がなされたという。[34] また、坂野氏は五相成身の教学的核心は、本有浄菩提心の功徳を開顕し、その妙用を具現させるところにあると指摘する。[35] この指摘のように五相成身観と浄菩提心とは密接な関係にあることが理解される。

皇慶の思想は『四十帖決』において、

師曰。五相之時。召二前ノ発字一ヲ。見二大楽ノ軌一ニ云云。持明曰ク。通達菩提心トハ亦タ名二徹心明一ト。謂ク徹ニ見スルカ自心本浄ノ菩提心一ヲ故也。修二シテ菩提心一ヲ正ク見二自心一ヲ而浄ニ月輪一ヲ耳。菩提心堅固ハ謂ク見ル菩提心ノ體一ヲ成ニシテ二昧耶形一ヲ也。永承二年三月十九日説。問。徹心明ト者心何ン。答。是レ通達菩提心ノ明也。故ニ徹ト者通達ノ義也云云。

寛徳二年二月二十日。問。金界五相ノ中ノ菩提心堅固ト者。於二テ心月一ニ観レ字ヲ。字變二シテ成二形一ト也。……中略……又タ云ク。五相成身ノ時。於二身上一ニ先ヅ仰テ観二月輪一ヲ。[36]

と説かれている。ここでは五相成身観の第一の通達菩提心と自心の本浄の菩提心を徹見することとが並列的に説かれている。第一の通達菩提心の際、身上において先ず月輪を観じることを説く。そして観法において月輪を浄める。行者は心月において月輪上の種子を観じ、その種子は変じて三昧耶形と成る。この所説は『行林抄』所収の阿弥陀法である紅頗梨色弥陀を観法する内容に相応すると言えよう。ここで大いに注目されるのは、皇慶が密教の五相成身観を阿弥陀仏の観法と対応させていたのではないかと思われる点である。また皇慶は浄菩提心を五相成身観の第一通達菩提心と捉えていたのではないかと推測される。筆者管見の限り、皇慶以前の人物で安然以

外には浄菩提心と五相成身観とを関係付けて表現するものが見当らない。安然は浄菩提心を五相成身との関係で『菩提心義抄』に示していたことから、ここにおいて安然から皇慶への影響の可能性が考えられよう。皇慶は行者の観法として浄菩提心を説き、通達菩提心も行者の立場で説いていたのであろう。

次に光明について考察を進めたい。京都大学図書館本『略私記』には、紇哩から大光明が放たれその種子は変じて蓮華と成り続いて阿弥陀仏と成りゆく観法が説かれる。これが『行林抄』では紅披璃色光明と示され、宝冠の阿弥陀仏の三昧耶形を観法することが説かれる。それは

次ニ道場観ナリ結ス如来挙印ヲ當下心於テ面前ニ観ズ安楽世界ヲ。瑠璃ヲ為シ地ト功徳乳海。於テ其ノ海中ニ観ニ紇哩二合字ヲ。放ツ大光明ヲ如シ紅頗梨色ノ。遍ク照ス十方世界ヲ。其ノ中ノ有情遇ヘバ斯ノ光ニ者無シ不ルニ皆ナ得ニ罪障消滅ヲ。是ノ字変ジテ為ス微妙開敷紅蓮花ト独鈷首上ニ有リ開敷紅蓮華ト。立ツ横ニ五鈷ヲ上ニ即チ変ジテ其ノ華為ス無量寿如来ト。身ハ在リ寶蓮花満月輪ノ上ニ。著ス五智寶冠ヲ住ス於定印ニ。身相ハ紅頗梨色ナリ。従リ頂上ニ放ツ紅頗梨光ヲ照ス無量恒沙世界ヲ。皆ナ悉ク紅頗梨色ナリ。與ニ諸ノ聖衆ト前後圍繞ス。如レ是ノ観ジ已レバ以テ此ノ挙ヲ印レスコト地ヲ七遍ナリ(57)

と道場観としての次第が示される。種子の紇哩を観想し紅頗梨色の大光明が十方世界を照す。その光明の滅罪が説かれ、行者は阿弥陀仏の三昧耶形を観じて蓮花月輪上に住する紅頗梨色五智寶冠の弥陀を観じるのである。皇慶が説いている光明について考察するとそこに安然の影響がさらに考えられるので、その点を次に論じておきたい。

この紅頗梨色の赤色は金剛界五仏を五色に配当する弥陀であり、五智の一つである妙観察智を意味する。この五智と五相成身観の関係を安然が『菩提心義抄』に説いていることは以前別稿にて論じたところである。(58)

また『菩提心義抄』には五相成身について「問。抑モ此ノ五相成身ノ行相ハ是レ有相観ヲ為ニ無相観ト(59)」と有相観・無相観の義を問答した後に

心地観経ノ三相中ノ第三ニ成身始観ズニ種大秘密法ヲ。一ニ心秘密観。満月ノ中ニ出ス生ス金色ノ五股金剛ヲ。二ニ語秘密。謂ク舉地宝多婆爾羅二合ニ身秘密。……中略……然ル後ニ入ニル大日三昧ニ諦カニ観ジテ自心ヲ以テ為ス月輪ト。[40]

と『心地観経』を引用する。そこで三密を説き、大日三昧に入ることを示し、『菩提心義抄』は次のように示す。

次ニ入ニル不動三昧ニ面ハ向ク西方ニ結ビ能摧伏印ヲ。即チ阿閦印。・中略……復タ於テニ西方ニ面ハ向ケ東ニ坐ス結ブ第一最勝三昧印ヲ。即チ弥陀印ナリ。亦タ誦ス上説大日真言ヲ。即チ以テ護字ヲ処シ月輪ノ中ニ置ク於頂上ニ。如シ紅蓮花色ノ。身ハ作ス紅蓮華色ヲ。即チ成ス弥陀ヲ。頂放ツ紅蓮華光ヲ。中ニ有リ無量ノ紅蓮華色ノ菩薩ヲ各作ス此印ヲ。光照ス西方恒沙世界ヲ衆生遇ヘ者ハ皆ナ入ニル三昧ニ。[41]

と金剛界大日を含めて五仏の観法を説く中で、西方において最勝三昧印を結ぶと説く。この最勝三昧は『心地観経』所説の宝冠仏として、毘盧遮那仏が結跏趺座の五仏宝冠から十方に光明を放ち一切衆生の滅罪を説く。この観察を毘盧遮那仏の最勝三昧とした。この滅罪を含む最勝三昧と同様の記述がこの『菩提心義抄』に見られる。行者の観法によって如来の光明による滅罪が説かれる点を注視すると、そこには管見の限りであるが、『心地観経』から安然の『菩提心義抄』へ、そして皇慶の道場観の所説という流れが見出されるのではなかろうか。

また安然は『菩提心義抄』において度々『心地観経』に言及したり経文を引用しており、その箇所は少なくとも四十五箇所にのぼる。『心地観経』は四恩説で知られるが、常盤大定博士の研究によると[42]この経典は般若・維摩・法華・華厳・涅槃を根本にしてその上に唯識の論を立て、実践門は弥勒信仰を説き梵網の大乗戒を教え、『摂真実経』などの三密修行を説くとされる。『心地観経』の密教部分は深く発達した密教とされる。しかしこの密教部分が『諸仏境界摂真実経』とほぼ一致している点を常盤博士は問題点として提示している。このように『心地観経』（西暦八〇〇年前後の訳出とみられる）は思想的に正に顕密融合思想を有した経典と言えよう。この経典を安然は重視しており、安然以降の顕密融合思想を考察する上で注目されるであろう。皇慶が説く光明は

道場観としての所説に特徴があり、そこに安然の影響が考えられることを指摘したい。

結語

台密事相の大家として名高い皇慶を中心に考察を進めた。皇慶の思想の一面はその著『弥陀念誦略私記』に特徴的にみられ、『略私記』は顕教の『観経』の文体を大いに参照して説いているが、皇慶が説く内容は顕教ではなく行者に向けた密教観法であった。そこでは本尊大日如来が阿弥陀仏として顕現する密教の道場観を中心に説いている。

『略私記』所説の紇哩が光明を放ち阿弥陀に変じていく一段は『観経』第七華座観の「一一ノ金色遍ニ其ノ寶土ニ。處處ニ變化シテ各作ニ異相ヲ一。」に呼応する表現とも理解されよう。皇慶において顕教と密教の関係は顕密一致として『四十帖決』に伝えられる。そのことは『略私記』においても同様に理解されよう。『略私記』の多くの箇所が『観経』を下敷きに表現されているが、本尊の弥陀は西方浄土としての弥陀仏ではなく、密教曼荼羅上での弥陀である。皇慶の『略私記』は彼の弥陀信仰を論じた文献ではなく、密教事相としての実践法の書であったといえよう。皇慶が顕教の『観経』所説の文体に目を向けて『略私記』を撰述したのではないかと考察される。

『弥陀念誦略私記』（京都大学附属図書館所蔵本）に説く浄菩提心は、『四十帖決』の所説を手がかりに考察すると行因至果として五相成身観と深く関係付けられているのではないかと思われる。また皇慶が五相成身観を阿弥陀法の観法と対応させていたのではないかと推論される。また皇慶は弥陀について顕密一致観を基に説いており、密教曼荼羅上の阿弥陀であるから大日如来の境界と理解されよう。このような皇慶の密教思想について、浄菩提心と五相成身観に焦点を当てて考察すると、そこには安然の『菩提心義抄』の影響が伺われた。『略私記』

に説く行者の月輪観において如来の光明による滅罪が説かれ、この点にも安然の『菩提心義抄』の影響があると思われる。

浄菩提心を如何に開発して即身成仏を説くかにあたり、皇慶は顕密一致の立場から顕教の『観経』の所説を巧みに取り込み、道場観としての『略私記』を説いたと考えられる。『略私記』で説く道場観は事相を重視する皇慶の具体的修法であったといえよう。

註

① 堀内規之『済遥教学の研究』三二六頁、ノンブル社、二〇〇九年。

② 苫米地誠一「『日本往生極楽記』と密教浄土教」(『仏教文化学会紀要』第二号、一九頁)。

③ 拙稿「常行堂の宝冠阿弥陀仏像の思想的淵源について—五智宝冠の思想的意義を中心に—」(『行信学報』第二二号、平成二一年)。

④ 苫米地誠一「紅頗梨色阿弥陀仏像をめぐって—儀軌と道場観—②」(『大正大学綜合仏教年報』一七)・苫米地誠一「紅頗梨色阿弥陀仏像をめぐって③—道場観を中心に—」(『智山学報』四二)。

⑤ 大江匡房作『谷阿闍梨伝』(続群書類従八下・『天台霞標』五編巻之二『大日本仏教全書』一二六・五六一頁)。

⑥ 『仏書解説大辞典』第四巻・一九一頁参照。

⑦ 『仏書解説大辞典』第二巻・三〇四頁参照。

⑧ 大正七六・三三頁中。

⑨ 伊東史朗「資料」(「院政期の仏像—定朝から運慶へ—」三二一頁~三二七頁、岩波書店、一九九二年)。

⑩ 苫米地誠一『平安期真言密教の研究』(八八三頁、ノンブル社、二〇〇八年)において指摘。伊東史朗前註本の翻刻解説に説明される。

⑪ 沼本克明「阿弥陀念誦略私記」(『高山寺古訓点資料』第四、七四一頁~七五二頁、東京大学出版会、二〇〇三年八月)。

⑫「丹州調門私記」に対して、この書は鎮西とあって、「鎮西調門私記」ではないかと思われる。皇慶は長保年間に筑前の背振山に登って修行しており、それは本書奥書の年号と符合する。

⑬「密教大辞典」縮刷版・六一五頁参照。

⑭「密教大辞典」縮刷版・一八四六頁参照。

⑮「密教大辞典」縮刷版・六九六～六九七頁参照。

⑯大正一二・三四二頁下～三四三頁上。

⑰「密教大辞典」縮刷版・一七五〇頁参照。

⑱「密教大辞典」縮刷版・八四三頁参照。

⑲「密教大辞典」縮刷版・二〇一〇頁参照。

⑳「密教大辞典」縮刷版・八頁参照。

㉑大正一二・三四三頁上～中。

㉒大正一二・三四三頁中。

㉓大正七五・八二五頁下。獅子王圓信氏は皇慶の顕密一致観を示す典拠として指摘する。「谷阿闍梨皇慶の密教について」(『密教体系』七、一二五頁、法藏館、一九九五年)。

㉔獅子王圓信・前掲論文による。

㉕大正七五・九四九頁下。

㉖浄菩提心の浄に自清浄として本有の義と離垢浄として修生の義と両義がある。菩提心に本有と修生の二義を説く。『密教大辞典』縮刷版・一一九九頁参照。『行林抄』では「阿弥陀法」以外の箇所において数箇所に「浄菩提心」について説かれている。

㉗大正七四・四一九頁上。

㉘大正七九・一三頁上。

㉙大正七九・四一頁上。

㉚大正七九・四二頁中。

㉛大正七九・五二頁中。

㉜ 大正七八・一〇六頁中。
㉝ 大正七五・五二六頁下。
㉞ 坂野栄範『金剛頂経に関する研究』二一七～二二〇頁、国書刊行会、一九七六年。五相成身観については田戸大智氏の論がある。氏は五相成身観に五智を配当する義が安然にあり、済遥が安然の説を踏襲しつつ、五智との対比から五相成身観が仏果の位にあると論じた意義は大きいと指摘する。田戸大智「五相成身観の日本的展開―安然と済遥を中心に―」（『東洋の思想と宗教』第二十五号）。
㉟ 坂野栄範・前掲書二二六頁。
㊱ 大正七五・八四五頁中。
㊲ 大正七六・三三頁中～下。『弘法大師全集』第二巻四九五頁～四九六頁。
㊳ 拙稿前掲論文。
㊴ 大正七五・五一四頁下。
㊵ 大正七五・五一七頁中。
㊶ 大正七五・五一七頁中～下。
㊷ 常盤大定「大乗本生心地観経・解題」（『国訳一切経』経集部六）。

キーワード　皇慶、弥陀念誦略私記、道場観、浄菩提心、五相成身観